

「ハーメルンの笛吹き男」—その現実と虚構

酒 井 明 子

目次：

<はじめに>

I 章 「ハーメルンの笛吹き男」の中世に伝わる形

1) 1565年以前の形

- ① 歴史資料による最初の形
- ② 13世紀当時のハーメルンの社会状況からの推理
- ③ 子供達の失踪の原因，理由に対する推理

2) 1565年以降の形

- ① 16世紀中葉の社会状況
- ② <笛吹き男>と<鼠捕り男>の結合

II 章 ゲーテとブラウニングの詩による「笛吹き男」

1) ゲーテ：“Der Rattenfänger”

2) R. ブラウニング：“The Pied Piper”

III 章 20世紀の「ハーメルンの笛吹き男」

—M.エンデの *Der Rattenfänger-Ein Hamelner Totentanz*

1) 構成と展開

2) 笛吹き男（鼠捕り男）の像

3) 作品の結末—著者の意図

- ① 子供達の行った先

② 石になった笛吹き男の意味

③ Mammon の勝利

<結びにかえて>

<はじめに>

「ハーメルンの笛吹き男」(*Der Rattenfänger von Hameln* または *Die Kinder zu Hameln*)はドイツ中部ハーメルン市に伝わる13世紀の伝説 Sage である。そのテーマは「当時の社会上層部のエゴと子供達の失踪という悲劇」と言えよう。日本では子供達が絵本で親しみ、中学校や高校の英語の教科書で“Pied Piper”の名で紹介されていたのを我々はよく記憶している。この話は、グリムがドイツ各地の伝説を集めた伝説集⁽¹⁾で広く知られるようになったが、実はすでに16世紀にグリムによるものと同じ内容のものが出版されている。それをさらに辿ればいくつかの異伝がある。

伝説とは、いつの時代からか無名の民衆の間に口伝えに語り継がれたものである。伝説は「異常なもの、珍奇なもの、前代未聞なものを報告」し、「個々の出来事に感動し、それを体験し、そしてそれがなにか重大なことと考え、ありのままに叙述する⁽²⁾」性格を持つ。また、「社会的相互作用と権力との対決の中での人々の実像を伝える⁽³⁾。」

ドイツ伝説の中でもっとも広く知られているのは、ゲルマン民族大移動時代に起源を発するとされる「ニーベルンゲンの歌」であろう。これは12世紀頃に大叙事詩にまとめられたのであるが、その人物は伝えられていない。ワーグナーの音楽劇「ニーベルングの指輪」によってこの伝説が世界的に知られるようになったのは言うまでもない。また、15世紀に、後に「民衆本」と呼ばれるようになった伝承文学が誕生している。この中にはよく知られる「テイル・オイレンシュピーゲル」や「ファウスト」も含ま

れる。15、16世紀、ヨーロッパ世界は重要な歴史の転換期を迎えていた。人文主義、ルネッサンス、宗教改革等の新しい精神運動が盛り上がり、神を中心にした中世から人間中心の近世へ脱皮する激動の時代であった。知への欲求が高まり、各地に大学が作られ、印刷技術を含む技術革新、そして、貨幣経済への移行など経済的にも力をつけていった時代であった。こうした時に「民衆本」が生命を授けられ、人々の心を潤したことは、想像に難くない。そして同時に、それまで口伝えに、または極く一部に手書きで伝えられてきた伝説の存在に、人々はあらためて注意の目を向けたということはあるだろう。口承の「ハーメルンの笛吹き男」が16世紀に印刷され、その存在が明確になったのは既述のとうりである。

それでは、「笛吹き男」伝説はどんな時代と背景の中で登場したのであるか。そして、どんな変形を加えられながら現代まで伝わって来たのであろうか。「この物語りには何か真実なものが隠されている⁽⁴⁾」というライプニッツ (1646—1716) の言葉と、「影の部分がヨーロッパの本質と深く係わっている⁽⁵⁾」という中世ヨーロッパ史研究家、阿部謹也氏の言葉が重なって、興味をそそるのである。前半で阿部氏の分析を参考にさせていただきながら、その興味ある推移を眺めることにする。

後半では、18世紀グリムに採録され、そして、その後英国のブラウニング (Robert Browning) が想像を広げて少年少女のための物語に書き換えた形、さらに、ゲーテによる作品を通して、この伝説の変形を観察した後、20世紀に引き継がれ、現代人作家によるその異形を論じてみたい。ここでは、ハーメルンのテーマに現代の実像を付与することの苦しさと、作者の痛々しい努力が観察できる。

I 章 「ハーメルンの笛吹き男」の中世に伝わる形

1) 「ハーメルンの笛吹き男」1565年以前の形

① 歴史資料による最初の型

「笛吹き男」伝説の一般的に知られている筋書き、従って、グリムによるものの大筋は次のようなものである。

1284年、ハーメルンに多色の斑模様の服を来た不思議な男が現れ、当時、鼠の洪水に苦しんでいた市の幹部達に、報奨金をもらうことを条件に全市の鼠退治を約束した。笛を吹きながら、町中の鼠を近くのウェーゼル川に導き、その約束を果たした。けれども、市長達は彼に約束の報奨金を払わなかった。笛吹き男はその裏切りに対し、今度は市の4才以上の子供達をことごとく笛の音に乗せて、ブンゲローゼ通り（die bungelose 舞楽禁制通り）を通り、町から連れ出し、近郊の山ポッペンベルグに行き、穴の中に諸とも姿を消してしまった。二、三の人の話では、子供達は穴を通り抜け、ジーベンビュルゲン（今日のハンガリー東部の山地）で再び地上に現れたと言う。子供達は全部で130人。それはヨハネとパウロの日の6月26日のことであった。市民の悲しみは大きく、子供達の失踪の日を起点に年月を数えるようになった。

「……メルヒエンが詩的なものに対して、伝説は歴史的である。伝説は多様な色彩によって特殊性を持つ。それは、何らかの知っているもの、意識しているもの、あるいは、ある場所や、歴史を通して確定している名前などにこびりついている事柄である⁽⁶⁾」とグリムも述べているように、人々の存在の姿や願望が投影されている。変容も同じ理由による。その時代の人々の姿が浮き上がってくるのである。この伝説のもっとも古いものは、ハーメルンの今はない最古の教会、マルクト教会の東の窓に1300年頃の改築までガラス絵として存在した。それは、〈笛吹き男と子供達の失踪〉をモチーフにした図柄と説明文とから成っていた。第二に古い資料は、1384年頃

のハーメルンのミサ書「パッションナーレ」のタイトルページに書かれたラテン語の詩である。第三は、1936年にリュネブルグの文書館で発見されたという1430—50年頃に書かれたと考えられているリュネブルグ手書本である。

この三番目のものは、次のように始まっている。

Zu vermelden ist ein höchst seltenes Wunderzeichen, das sich in der Stadt Hameln in der Diözese Minden im Jahre des Herrn 1284 gerade am Tage des Johannes und Paulus ereignete. Ein Jüngling von dreißig Jahren, schön und überaus wohl gekleidet, so daß alle, die ihn sahen, ihn wegen seiner Gestalt und Kleidung bewunderten, trat über die Brücke und durch das Wesertor (in die Stadt) ein. Auf einer silbernen Flöte.....

(まったく不可思議な奇跡が伝えられている、ミンデン司教区内のハーメルン市で1284年のちょうどヨハネとパウロの日にあった事である。30歳くらいの、とても美しい服を着た、見た者が誰も感嘆したほどの若者が、橋を渡ってヴェザー門を通過して町に入って来た。銀色の笛で.....)

この後、130人の子供達は東門から sogenannten Kalvarien⁽⁷⁾ (いわゆるカルヴァリー) へ行き、そこで消えたこと、子供の母親達があちらこちら捜しまわったこと、ラマで一つの声が聞こえ、母親達は息子達を思って泣いたこと、失踪の日から年月を数えるようになったこと、そして最後に

Dieses habe ich in einem alten Buche gefunden.....Und die Mutter des Herrn Dekans Johann von Löde sah die Kinder fortziehen.

(私はこれをおある古い書物で見つけた.....そして主席司祭ヨハン・

リューデ氏のお母さんが子供達が出て行くのを見た)

となっている。(8)

ここで見るように、三点は記録であり、何の飾り気もなく、何ら超自然的な要素を含むことなく、単純素朴に、1284年ヨハネとパウロの日に愛すべき130人のハーメルンの子供達が、ある男に連れられて、＜カルヴァリー山＞へ向かい、そこで突然消え失せたことを伝えている。子供達の失踪と日付けが複数共通していることから、まさに、現実起こった歴史的事実として確認されている。

しかしながら、歴史的事実と確認されたその資料のどれにも、130人の子供達がどうして行方不明になったのかは書かれておらず、失踪の原因は初めから謎とされていたらしいと指摘されている。

② 13世紀当時のハーメルンの社会状況からの推理

a.

ハーメルンは北海からドイツ中央を貫くヴェーゼル川に近く、早くからその川上流のフルダ修道院によってキリスト教の布教が行われていた。また、フランク王国時代から軍用道路に沿っており、東西交通の要衝にあつた。13世紀までフルダ修道院はそこを中心とする大荘園領主制のもとに大きな権力を持っており、ハーメルンは、その前進基地とも言うべき聖ボニファティウス律院の指揮下にあり、人々は律院の賦役農業に携わっていた。そして、大荘園領主制が崩れていくに伴って、ボニファティウス律院はフルダ修道院から離れ、それ独自の指揮権を発揮するようになる。それと同時にヴェーゼル川は水車による製粉業を育て、ハーメルンは市場定住地として、経済のかなりの部分をこれに依存するようになる。後に述べるが、笛吹き男＝鼠捕り男 (der Rattenfänger) の構図が、この地で大きな意味を持つようになる理由がここにすでに見られる。

b.

12世紀、フルダ修道院からボニファティウス律院の守護職を預かったエーフェルシュタイン家が、ハーメルン市の建設の中心になった。律院が独立した後も市民を味方に引き入れ、その力を広げていったが、ハノーファー王国を建設し、ヴェーゼル川地域に進出を狙うヴェルフェン家と、ケルン大司教配下のヴェーゼル川下流のミンデン司教区が、ハーメルン市と守護職に宣戦し、〈ゼデミューンデの戦い〉（1260年）が起こった。

ゼデミューンデの戦いは、130人のハーメルンの子供達の失踪の原因を跡づけようとする研究者たちに注目されている事件である。この戦いでハーメルン市民軍は壊滅的な敗北を喫し、多くの市民が殺された。若者達は市の〈東門〉を通り抜けて、戦いに出て行き、多くが二度と戻らなかった。⁽⁹⁾

ゼデミューンデの戦いの後、エーフェルシュタイン家は衰退し、代わりにヴェルフェン家を領邦君主とする領邦都市になったが、その代償として広範囲の地域での関税免除の特権を得ることになった。それがハーメルン市の商業発展のきっかけになり、その後、都市法の整備と共に、市長職、市参事会、官僚、また、手工業者の組合などが制度化され、関税、漁業権などの特許が与えられた。こうしたハーメルン市の複雑な発展の姿は、本論の後半につながる重要要素である。

c.

このようにハーメルン市が都市として形を整えて行く一方で、一般庶民の生活はどうであったのか。阿部謹也氏によれば、「彼らにそれまであったさまざまな可能性が狭められ、一定の枠の中に铸込まれてゆくその姿にこそ注目しなければならない。」⁽¹⁰⁾つまり、「外面的繁栄の影で呻吟していた極めて多くの庶民」⁽¹¹⁾がいたこと、この人々の嘆きや悲しみを捉えることが、消え失せた子供達の問題を明らかにすることであると述べている。

ヨーロッパ中世都市は、一般的に一つの都市城壁内部に多様な人々が階層差を持ちながら暮らしていた。市民という言葉は注意して使わねばならない。その基本的条件は一定の財産を持つ自由人であることである。守護職、教会関係者の他に、完全な自由人である大商人層、小売り権のみ持つ小商人層、組合権を持つ手工業者の順に、その下に律院の隷属民がおり、都市建設と共に周辺農村から流入してくる移住者などで構成され、階層による差別状況はその後長い間続いた。ハーメルンで1235年初めてその存在が確認されたとある⁽¹²⁾市参事会に、初めは加わることが出来た手工業者も同世紀中頃には廃除され、世紀後半には大商人達がそれを独占した。市内における富者＝豪族の支配は確立した。

領域支配権を巡る領主達の争い、そこから排除されていく人々、農民の収奪を常とする守護職、この権力構造の中で商人達は富を拡大し、力を広げてゆく。時と共に身分制原理と財力の原理との確執が一般化する。そしてそのどちらからもはみ出してしまう多くの人々が下層民である。商業や工業で働く職人、徒弟、奴婢、賃金労働者、日雇い労働者、婦人、貧民、乞食、賤民等が挙げられるが、このなかで最下層に位置付けられ、まったく名誉を奪われたのが、刑吏、墓堀人、皮剥人、牢守、道路煙突清掃人、煉瓦工、遍歴芸人……などである。

これら賤民に特徴的なのは、祭に参加できないことや、一定の衣服着用義務や、病院に入ることが出来ない等種々の規制が適用されていたことである。極貧であるばかりでなく、さらに上からの規制を受けたのは、市当局が下層民の仲間意識や団体行動の盛り上がりを恐れたからであると指摘される。多数を占める名誉を奪われた者達の存在が、市上層部にとって脅威の的であったことが伺われる。

③ 子供達の失踪の原因、理由に対する推測

130人の子供達の失踪の原因については、ドイツ国内外において400年に

わたって研究されてきている。現代における代表的研究者の一人 Wolfgang Wann の研究史(1948年)を参考に、その25のテーマ分類から検討に値するものとして阿部氏が指摘する中から、さらにいくつかの項目を挙げてみる。

1. 舞踏病
2. 子供の十字軍
3. 東ドイツ植民説
4. ジーベンビュルゲン (今日のハンガリー東部の山地) への移住
5. 1260年のゼデミュンデの戦いで戦死
6. 1285年偽皇帝フリードリッヒ 2世の後をついて行った。
7. 崖の上から水中に落ち溺れ死んだ。
8. 地震による山崩れで死亡
9. 遭難説

すでに述べた13世紀頃のハーメルンの社会状況と人々の暮らしぶりから、5. に挙げたゼデミュンデの戦いで戦死の説に見るように、当時の子供達が組み込まれていった可能性の様々が社会背景と共に浮かび上がってくる。その社会背景との関係で説得力があると考えられる1. と2. 3. と4. を取りあげてみる。

a. 子供の十字軍、および舞踏行進等

一部の上層階級の子供達を除いて、教育制度が確立していない時代、厳しい社会的、自然的環境のなかに子供達はほとんど保護もない状態に置かれていたことは容易に想像がつく。1212年、フランス、オルレアンで羊飼少年が、自分の前にキリストが現れ、十字軍に赴くように説いたと述べる事件があった。その少年は説教を始め、数千人の少年少女を集めて、マルセイユまで行進した。が、二人の商人の輸送船に乗り込んだまま行方知れ

ずになった。ある説によると、子供達はアフリカの沿岸で奴隷として売られてしまったことになっている。また、同じ1212年ドイツでも似たようなことが起きた。ケルンで10歳の少年がモーゼを自称し、十字軍遠征を説いた。多数の少年少女を集め、アルプスを越え、ジェノヴァ、アンコナを経由、イタリア端の長靴の踵ブリンデイシまで長距離を進み、そこで挫折したと言う。ハーメルン近くのエアフルトでは、1237年、多数の子供達が「使徒は遣わされたり」と唱いながら夢中で踊り歩き、疲労困憊の末倒れてしまったと言う話もある。

当時の人々が鬱屈した日常生活を逃れて宗教的興奮のなかに我を忘れたのと同じように、子供達も自ら出口を求めて行動を起こしたことが伺える。そうした意味で、中世社会で一年に何回も繰り返された祭りにも触れなければならない。四旬節とヨハネ祭は本来、ゲルマン民族的な祭りとして冬を追い払う春の祭りであった。四旬節の前の三日間ファスナハト(謝肉祭、カーニバル)で、人々は四旬節の厳しい禁欲を強られる前に、爆発した。日常の不満は陶酔状態をもたらす。歌、踊り、遊び、愚行と馬鹿騒ぎの坩堝のなかで⁽¹³⁾、人々は自制心を失い、忘我の踊りと練り歩きで苦しい生活感情を解放させた。子供達は大勢で祭りの興奮のあまり、町から二マイルの<ポッペンベルグ>の崖の上に火を灯しに行き、その湿地帯にある底なし沼にはまり込んでしまったと言う真実味のある説もある。

b. 東ドイツ植民説

ヨーロッパ各地で経済活動が拡大するにつれて、人々の動きも激しくなった。遠隔地貿易への移行は各都市の人口移入を盛んにし、それまでの村々の形態は大きく変貌していった。先祖伝来の領主に代わって新参加者が君臨するようになる。ハーメルンにおいては、その三分の一が森林であり、10世紀以来の市内の急速な人口増加は土地不足をもたらした。商人達は市周辺の森林を切り倒し、土地を買い占めていく。数多くの農民が土地を失っ

て市内に追いやられた。しかし、市民権を持たない住民には市内で十分に暮らしてゆける条件がなく、下層民の子弟は新家庭を持っても独立した家計を営むことが出来なかった。こうした社会状況のもと、実際、12、13世紀、中部ヨーロッパでは大量の人々が植民請負人に率いられてドイツ東部へ、さらに、チェコやポーランド、ハンガリーの東欧へ移住した。1250—1300年の間に300人以上にわたる植民請負人が西ヨーロッパ各地で移住する農民を募っていたと言う記録がある。

W.ヴァン (W. Wann) はこの史実に注目した。つまり、ハーメルンでも東方植民の話が請負人によりもたらされ、多くの若者達がこの話に乗り、集団でヨハネとパウロの日に狭い〈ブングローセ通り(舞楽禁制通り)〉⁽¹⁴⁾を通り、市の〈東門〉を抜け、町の境界である〈コッペン〉の麓で両親と別れたというのである。また、研究者の一人、H.ドバーティン (H. H. Dobbertin) は、1955年にこの東ドイツ植民説に遭難説を加えている。

以上、130人の子供達の突然の失踪の理由を、研究者達の推論を通していくつか眺めてみた。これらの研究は130人が居なくなったことに重点が置かれ、あくまで子供達が主人公である。それは既述のように1565年以前の資料に基いている。それでは、グリムの伝説で見るように、笛吹き男は鼠捕り男であったという次に現れた話はどんな背景を持って生まれたのだろうか。

2) 「笛吹き男」1565年以降の型

1565年頃に書かれたと見られる二つの記録がある。ボーデン湖の北メスキルヒで書かれた「チンメルン伯年代記」と、1566年にバーゼルで出版されたヨハンネス・ヴィエルス (1515—1588) の「悪魔の幻惑について」である。ここで初めて、〈鼠捕り男〉がハーメルンの子供達の失踪と結びついて現れ、グリムの話と同じ形で示されている、と阿部氏は指摘する。つまり、「ハーメルンの笛吹き男」伝説は、それまでは鼠という要素はまった

く見られなかったのが、このとき以来、〈笛吹き男〉は同時に〈鼠捕り男〉になったのである。1553年に書かれたものには、まだ鼠捕り男の話はなかったが、1650年に書かれたものには、グリムの形がほぼ完全な姿で叙述されているとのことである。ちなみに、C. L. Petzoldt, *Hitorische Sagen II*⁽¹⁵⁾（「歴史的伝記II」）では“Der Ratten fänger von Hameln”として四つの異伝を扱い、前三者には笛を持つ男のみでまったく鼠は登場せず、四番目の話が〈笛吹き男〉と〈鼠捕り男〉の合体形であり、グリムが採録したものと同形である。それではこの変化はどのように起きたのであろうか。当然、鼠の被害の拡大が大きな社会問題になっていたことが想定できる。その点をもう少し詳しく見てみたい。

① 16世紀中葉の社会状況

既述の1553年に書かれたものとは、当時のバンベルグの市長代理ハンス・ツアイトロースによる日記であるが、その中に、ハーメルンの人々は300年後の1583年に、つまり、あと30年後にあの同じ笛吹き男が町にやってくると恐れおののいていたことを伝えている。これを阿部氏は「彼らの不幸が300年という時の変転にもかかわらず、癒されないままであったことを物語っている」⁽¹⁶⁾と分析している。実際、1551年、大火で160軒が焼失、1552年、ヴェーゼル川氾濫で町全体が浸水、その結果、農作物の不作と価格の暴落があり、同じ年、ペストの大流行によりハーメルン市だけで1400人の命が失われた。⁽¹⁷⁾また、1550—53年、激しい宗教戦争が市の門前で行われた。大きな支配権を持つカトリックの律院に対して、市参事会と市民が1540年にルター派プロテスタントに移行した為の軋轢の結果であった。律院は、人々の不幸は神罰の結果だと宣伝し、彼らを恐怖のどん底に陥れた⁽¹⁸⁾。

ハーメルン市がヴェーゼル川からの水で水車による製粉業が盛んであることに鼠の繁殖理由が見られることは触れた。ヨーロッパ中部各地で鼠の被害は大きく、当時、どこでも穀物貯蔵の際にその目減りは覚悟しなければ

ばならなかったという。「チンメルン伯年代記」には、1538年にメスキルヒで鼠が大量に発生し、駆除されたこと、また、シュワーベンガウでも鼠が激増したことを記している。そしてその後に、ハーメルン市が無数の鼠に襲われ、見知らぬ放浪者が一定の報酬を条件にその退治を申し入れ、鼠の退治後に市から裏切られた話を載せているわけである。鼠退治を専門とする職業的な鼠捕り男が各地を巡っており、鼠の駆除により報酬を得ていた。後にはツンフトを形成するほどであったらしい。従って、鼠捕り男を巡る話はヨーロッパのあちらこちらに見つけられる⁽¹⁹⁾。悪名高いペストの流行は、鼠の害に苦しんでいた彼の地の不幸を彷彿とさせるものである。

2) <笛吹き男>と<鼠捕り男>の結合

中世の階層社会で、笛吹き男の属する旅芸人達の、及び、同じく旅をしながら鼠を捕って歩くのが仕事の鼠捕り達の、階層がどこに置かれていたかを考えれば、この両者の結合の由縁が想像できる。また、なぜ子供達が失踪したのかの理由にはまったく触れられていなかった初期の形は、この結合で理由づけを持つことになったのである。なによりも、以下に述べるように、16世紀の惨状がその理由とされたことは大きく胸を打つものである。

この16世紀後半の不幸に見舞われつづけた人々の状況が、同じ不幸が1284年の300年後に起こるという恐れを生じさせ、さらに、それは神罰の結果であると、教会は、人々の恐怖を拡大したのである。こうした不幸の中で、鼠を排除してくれる鼠捕り男は、人々にとって救い主でもあった。鼠捕り男に支払いを拒絶した市参事会を含めた上層部の裏切りは、彼ら庶民が受けた裏切りである。領地の取り合いのために戦いをつづける上層部、その合間をうまく利用して力を拡大していった商人達、その下で否応なく巻き込まれて行く庶民達の救われない状況は、支配者に対する怨念となって現れる。

忘恩に対する鼠捕り男の復讐モチーフは、こうして、当時の社会的背景の存在が強いインパクトとなって誕生したことを想像させるのである。伝説とは、「その時々々の社会状況に対する庶民の反応として」⁽²⁰⁾語り伝えられてきたのであるから、この場合も、同じことが可能であろう。「庶民にとっては、笛吹き男や鼠捕り男でさえ、自分達の怒り、悲しみ、絶望を共に分かち合う存在となる。鼠捕り男が庶民と同じ裏切られた存在として描かれることは、この時の庶民の絶望の深さを示している」⁽²¹⁾と述べられる通りであろう。

II章 ゲーテとブラウニングの詩

I章で、「笛吹き男」伝説を、歴史学者の分析を通して、背景である中世社会の状況と共に、考察してみた。非常に洞察鋭く描かれる当時の社会の現実を理解して初めて、この伝説の真価に心を打たれるのである。つまり、時代の人々の姿、精神の、逃げどころのない投影として、この伝説が浮かび上がってくることに強く心を揺さぶられる。この一地方の話はその後、人々を捉えて放さず、文学、書物を通して広められていった。

17世紀の多くの知識人達は、この不可解な現象を対象化し、啓蒙時代への足がかりを作った。ライプニッツはこの伝説の中に真実があることをかぎわけた。しかし、啓蒙時代の精神は、理性的自立的な人間の共同体を目指したのであるから、伝説の非合理性とは相入れず、むしろ「伝説の非合理性を暴いてみせよう」⁽²²⁾とした。非合理的世界に生きている民衆の俗性を軽蔑し、それを啓蒙しようと試みた時代であったのだ。

そして、19世紀、ドイツ民族統一の旗印のもと、民族共通の過去を求めて、中世史研究、民俗学研究と共に民間伝説の採集が奨励された、いわゆるロマン主義運動が起こる。そうしたなかで、グリム兄弟はハーメルンの伝説を、16世紀から伝わる型を忠実に採録した。ロマン主義を掲げる人々

は啓蒙時代の研究者と違って、どのような伝説もメルヒエンもそれ自体の中に無限の価値を持ち、人々の精神の啓示であると、捉えた。しかし、このロマン主義の傾向は、ここまで述べてきたような伝説形成の歴史的分析を避ける一方で、「本来柔軟な発展の可能性を持った民衆の精神を絶対化し」、「必然的な絶対化への基準を求めて、ゲルマン時代の神話の世界へつながっていく」⁽²³⁾という批判的評価を与えられている。

近代へ「笛吹き男」伝説を橋渡したうえで知られているのは、グリムと同時にゲーテとR. Dブラウニングであろう。ゲーテの“Der Rattenfänger (鼠捕り男)”は、1823年に書かれた子供向きの絵入りバラードであるが、人々に非常に親しまれ、よく読まれたと言う。シューマンやヴォルフなどの音楽家がゲーテの詩を使って作曲をしている。ブラウニングの詩、“The Pied Piper of Hemelin (ハメリンの笛吹き男)”は1842年に書かれ、ゲーテのものよりかなり長い。

1) ゲーテ：“Der Rattenfänger”

Ich bin der wohlbekante Säng̃er,	身どもこそ天下に知られた歌う たい
Der vielgereiste Rattenfäng̃er,	あまねく旅して、ねずみ狩る。
Den diese altberühmte Sadt	由緒も名高いこの町は
Gewiß besonders nötig hat.	是非とも身どもが入用なはず。
Und wären's Ratten noch so viele,	たとえねずみがいかにほどいるに せよ、
Und wären Wiesel mit im Spiele,	いたちも一しょにあばれようと、
Von allen säubr ich diesen Ort,	すっかり清めてごらんに入れる。
Sie müssen miteinander fort.	みんなきれいに退散するは必定。

Dann ist der gutgelaunte Sänger
Mitunter auch ein Kinderfänger,
Der selbst die wildesten bezwingt,

Wenn er die goldnen Märchen singt.

Und wären Knaben noch so trutzig,
Und wären Mädchen noch so stutzig,
In meine Saiten greif ich ein,
Sie müssen alle hinterdrein.

Dann ist der vielgewandte Sänger
Gelegentlich ein Mädchenfänger ;
In keinem Städtchen langt er an,
Wo er's nicht mancher angetan.

Und wären Mädchen noch so blöde,
Und wären Weiber noch so spröde,
Doch allen wird so liebe bang
Bei Zaubersaiten und Gesang.⁽²⁴⁾

それからこの陽気な歌うたい、
時には子どもさらい申す。
おとぎ話をふしおもしろく歌い
もすれば、
手に負えない子どもさえころり
とさせるこの手くだ。
どんなに強情な男の子でも、
どんなにきかぬ女の子でも、
一度いとをならしもすれば、
みんなぞろぞろついて来る。

それから器用無類の歌うたい、
折りには娘もつかまえ申す。
行く先々の町々で、三人五人の
娘たち、うっとりさせぬことは
ない。
どんなにはずかしがりの娘でも
どんなにすげない女房でも、
魔法のいとと歌ごえを聞きもす
れば、みんな恋心をそそられて
胸をときめかす。⁽²⁵⁾

ゲーテの鼠捕り男は、笛の魔力で、鼠ばかりでなく、いたちも捕らえ、聞き分けのないいたずら小僧達を大人しくさせ、挙げ句の果ては、娘や女房達の心を虜にしてしまう。各二行ずつが形良く韻を踏むなかで、三つの節二行目の、Rattenfänger, Kinderfänger, Mädchenfänger (鼠捕り、子供捕り、娘捕り) が詩の内容をたのしく、弾む雰囲気を展開させる。

Mädchenfänger は詩人ゲーテの面目躍如たる詩心の為せる技であろう。ここには、ブンゲローゼ通りも東門も、また、カルヴァリー山も出てこない。従って、裏切りの話も、苦しみ話もなく、男は、素敵な恋人に昇華されて、のどやかで、ロマンティックな雰囲気に入れられ、人々に伝えられていた。このゲーテの三節目は、これから述べるM. エンデの創作への影響という点で、注目しておく必要があるだろう。

2) R. ブラウニングの“The Pied Piper of Hamelin”

この詩は、A CHILD'S STORY, (Written for, and inscribed to, W. M. the Younger)⁽²⁶⁾ と但し書きがある。ブラウニングの作品を Covent Garden Theatre で自ら監督上演した役者であり、且つ後援者の William Charles Macready (1793-1873) なる人物の息子 Willie の病後の読み物として、ブラウニングが書いたかなり長い詩である。1842年に上演されている。その長さ故に、ここに全てを紹介することは出来ない。主なポイントについて述べてみたい。

第一に、この作品の解説者はブラウニングの典拠について触れ、それを Richard Verstegen: “Restitution of Decayed Intelligence” (Antwerp, 1605) の伝説であるとしている。それはこの詩の中で、子供達の失踪は1284年ではなく、1376年としている(275行目) ことから来ると思われる。約500年前の出来事としている(7行目)。しかし、日付けを6月26日ではなく、22日としていることは、上記 Verstegen のものとも異なり、この点に関しては、むしろ、グリムの紹介の形が参考になる。

鼠の出没、市長以下市議会の面々のあわてふためきぶり、そこへ現れた “the strangest figure” は頭からつま先までの長い、黄色と赤のコートを身につけ、鋭い青い目と明るいうっとりした髪の毛の、浅黒い痩せて背の高い男だった。 “and nobody could enough admire/ The tall man and his quaint attire.” とその優雅な様子は人々の憧憬の的になる。この

笛吹き男の像は、リューネブルグの手写本に見る像を思わせる。ともに、彼を見た人が誰でもその美しい身なりと人物に感嘆するのである。

その“Pied Piper”は鼠の除去を千ギルダーで申し出て、それはジョークだったと裏切られ、再び町に出てくる。そして三音吹くか吹かないうちに、子供達のやってくる足音がする。その音をこのように美しく表現する。

“And ere he blew three notes (such sweet
Soft notes as yet musician’s cunning
Never gave the enraptured air)” (194—196行目)

また、これに続く子供達の登場を次のように、愛らしく、詠う。

“There was a rustling that seemed like a bustling
Of merry crowds justling at pitching and hustling,
Small feet were pattering, wooden shoes clattering,
Little hand clapping and little tongues chattering,
And, like fowls in a farm-yard when barley is
scattering,
Out came the children running,
All the little boys and girls,
With rosy cheeks and flaxen curls,
And sparkling eyes and teeth like pearls,
Tripping and skipping, ran merrily after
The wonderful music with shouting and laughter.”

(197—207行目)

韻とリズムが見事に調和し、小さな子供達がいそいそと、嬉しそうに、期

待に頬を輝かせて集まってくる可愛らしい様子が、動画を見るように伝わって来る。

そしてそのまま、コッペンベルグの丘に向かう。笛吹き男と共に子供達が大きな洞窟に姿を消した後、一人後に残された足なえの男の子が、その後何年にも渡って批判気に問われると、こう言ったという。

“I can't forget that I'm bereft
Of all the pleasant sights they see,
Which the Piper also promised me.
For he led us, he said, to a joyous land,
Joining the town and just at hand,
Where waters gushed and fruit-trees grew
And flowers put forth a fairer hue,
And everything was strange and new ;
The sparrows were brighter than peacocks here,
And their dogs outran our fallow deer,
And honey-bees had lost their stings,
And horses were born with eagles' wings :
And just as I became assured
My lame foot would be speedily cured,
The music stopped and I stood still,
And found myself outside the hill,
Left alone against my will,
To go now limping as before,
And never hear of that country more !” (236—255行目)

ここに、子供達の導かれて行った“a joyous land”が、刺のない蜜蜂や鷺

の翼を持つ馬がいたり、自分の萎えた足も急速に直ってしまうような、子供の目を通して夢見る素晴らしい所として描かれる。

ゲーテの作品と違う点は、このブラウニングのものは物語り詩とも言える説明的要素を細かに提示している。最終部分に、子供達が最後に通った通りを“the Pied Piper’s Street”とし、舞楽禁制の由来を語っている。また、I章で述べたこの伝記の最初の形跡であるマルクト教会の窓に描かれて、子供達の失踪が人々に知られるようになった由来、そしてさらに、トランシルヴァニアに見いだされた異邦人達とその来たる道を人々の言い伝えとして、載せていることを注目したい。こうした史実に忠実に従おうとしている点は、やはり、既述のように、ブラウニングが、時代の流れの中で、この伝説の見事な伝達人であったことを再確認させるのである。

III章 20世紀の「ハーメルンの笛吹き男」

—M. エンデの *Der Rattenfänger—Ein Hamelner Totentanz*

(「鼠捕り男—ハーメルンの死の舞踏」)⁽²⁷⁾

M. エンデの作品 *Der Rattenfänger — Ein Hamelner Totentanz* は彼の死の前年1993年に出版された舞台用のシナリオである。エンデは、すでに *Der Guggolori* (「ゴッゴローリ物語り」) などでシナリオ作家としての地位も獲得している。エンデの「鼠捕り男」は、1565年出版の「チンメルン伯年代記」以降の型をその土台としていることは明白である。中世ハーメルンの社会状況をかなり史実に沿って描写していることは、前半で述べた現実の様相と照らし合わせることによって、説得的構成要素となっている。しかし、そうしたリアリティーを背景に、彼なりの意表をつくような独特な創作を行い、物語りの展開を図っている。「あの伝説は開かれている。後生に語り継ぎを求めるように⁽²⁸⁾」という著者の言葉は、19世紀の二人の詩人のように、また、それ以前の多くの語り継ぎを作品にしてきた人々

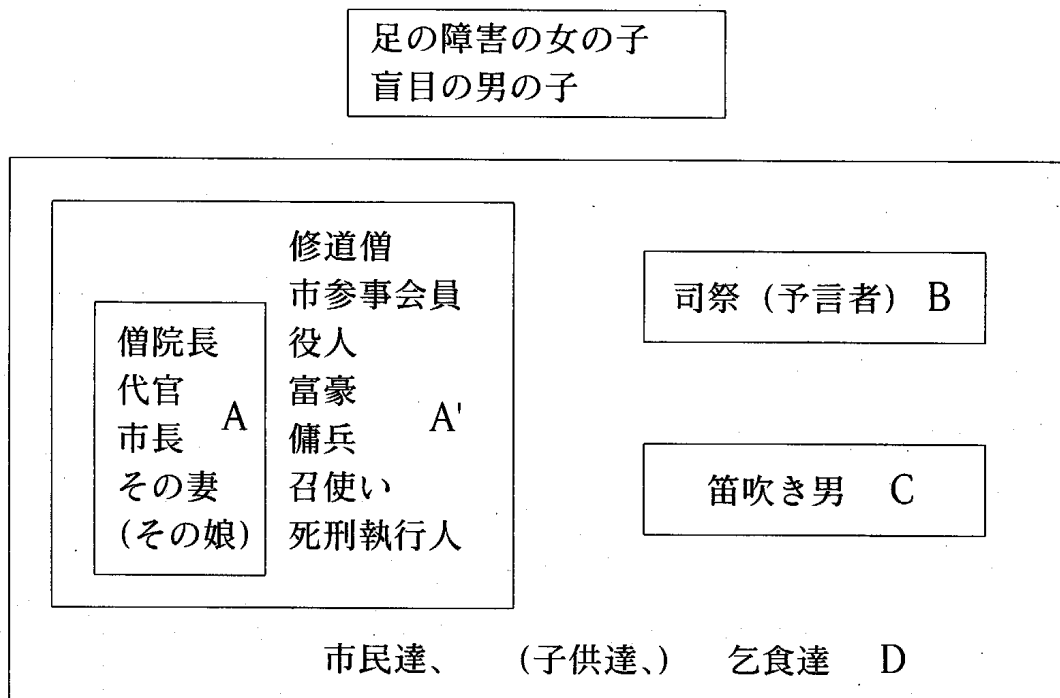
のように、現代に生きる語り手として、20世紀の感覚で捉えた〈笛吹き男〉を描こうとする心意気を示している。以下、物語りの構成と特徴を紹介しながら、著者の狙いとその意味を探る。同時に、伝説の現代的異伝と考え得るかどうかという観点も除かずにおくつもりである。

1) 構成と展開

冒頭古いドイツ語で次の導入がある。

1284年、聖ヨハネ、聖パウロの祝日
 色鮮やかな衣を着た笛吹き男に誘われ
 ハーメルン市に生まれた子供130名
 コッペンのカルヴァリー丘に入り、姿を消した

ここでは、最も早い時期の、子供と笛吹き男のみの事実を簡潔素朴に伝える型を、導入として非常に効果的に使っている。以下に、物語りの登場人物を、その筋に即して、グループ分けにして紹介すると次のようになる。



欄外の子供二人は伝説では、130人の中に入れず置いて行かれ、事件の目撃者となった子供達で、ここでは初めから最後までストーリーの解説者として登場する。Aグループの人々は市の指導部を構成し、他の人々の犠牲の上に富を肥やしてゆくことに懸命である。A'のグループはAの人々の言うままにいつでも靡く人間である。Bの司祭はゴットフリード・ヴェレゲジウスというゲルマン系の名を持ち、真実を見通す予言者でもある。史実を参考にすれば、当時ハーメルンをその支配下においたボニファティウス律院に10世紀には11人いたという司祭の一人と考えることも可能だろう。しかも、彼らはゲルマンの名前を持っていたという⁽²⁹⁾。ここでは、古きゲルマン信仰の世界に入り込み、権力を欲しいままにしているキリスト教僧院に対する力の象徴として、ゲルマンの時代に共感を持つ作者がそれを意図的に取り入れたと見ると作品として効果的である。市上層部が密かに行っている悪事を暴露し、鼠の害のために、貧困と疫病が覆うハーメルンの町を救う者が現れると予言したがゆえにカルヴァリーの丘(ゴルゴダの丘)⁽³⁰⁾の上で処刑される。Bと、Cの笛吹き男がAとA'の対極に位置し、行動する人間であるのに対して、Dの人々は弱く、盲目の民として描かれる。鼠の大群から逃れる方法を知らず、町の不幸を全部引き受けていながら、指導部の甘言に騙される。笛吹き男の登場に、町の救い主として歓喜した後でも、市長らの大判振る舞いに踊らされ、へつらう哀れな人々である。() つきのその娘と子供達は、それぞれA、Dのグループに所属しながらも、笛吹き男の登場で、そこから離れ、昇華される存在である。

再び、Aのグループに戻ろう。この人々はもっと明確に13世紀のハーメルンの指導部の史実に照らし合わせることが出来る。僧院長はこの町の権力の頂点を握っている様子の描写から、ボニファティウス律院直属の人物を彷彿とさせる。しかも、この人物は、13世紀ニーダーザクセン地域の総元締めであったフルダ修道院の司教座を狙い、Teufelskreis(悪魔の循環→悪循環)に陥って、救いようのない自らの秘密の源をハーメルンの町と共

に、エーベルシュタイン伯爵なる人物に売り渡そうとするのである。史実ではフルダ修道院の世俗的利益を守るために派遣されている当時の守護職はエーフェルシュタイン伯爵となっているから、エンデはやはりこれをならったと考えることが出来よう。そして、僧院長に「最も偉大な力はまさに聖なる者の力なのだ」⁽³¹⁾とうそぶかせ、中世のキリスト教の権力の誇示を明記する。また、同じく、代官アメルング・ライッケは市の裁判権を委ねられているフルダからの地方行政官として、人々の行動を縛る。

Teufelskreis とは何か。ここにエンデの狙いの一つがある。ドイツ人はこの言葉をいろいろな場合によく使うが、この作品の中で、Teufelskreis は物語り進展の鍵になる。子安美智子氏によれば、エンデが着目したのは、1. 鼠の害が生じるに至った原因、2. 笛吹き男に報酬が支払われなかった理由の二点であるという。さらに、1. については、鼠と呼ばれている害は実は、もっとはるかに破局的な黙示録的な意味を持つ状況のことであり、2. については、上層部が強く支払を拒まねばならなかったほどの報酬とは、よほどのつぴきならない代償だったに違いない、とエンデは考え、その結果、1と2は密接につながっていると考えた、と述べている。⁽³²⁾つまり、笛吹き男が要求したのは、氾濫する鼠を生み出すものとイコールだったのではないかとするのである。エンデのファンタジーは、〈報酬〉と〈原因〉を一致させるという離れ技をやったのけた。

作品の中で Mammon と Rattenkönig で表される、市の Krypta (地下聖堂) に隠された代物が、その作者の被創造物であり、この物語りの隠れた主役である。つまり、その代物は鼠を氾濫させると同時に、金銀を尻から排出していたという細工である。Mammon は富と欲の神であり、Rattenkönig は鼠の王様である。金銀を手に入れるためには、同時に鼠も飛び出すのを許すという仕かけによって上層部の獲得する富の量は、町の人々の鼠の害と貧困と疫病と死の増加と比例するのである。〈鼠捕り男〉が町の全鼠を排除しても、Mammon が働く限りは同じ悲惨な状況は繰り返される。僧院

長初め、市長夫妻など上層部はこの秘密を守るに必死であるが、鼠捕り男、つまり笛吹き男はこの Teufelskreis を見通していたからこそ、Mammon を要求したのである。

上層部にあつて、大人達の悪事に耐えられず、一人そこを抜け出る市長の娘に、著者は特別の役割を与えている。名前は<マグダレーナ>、その象徴性のために、物語がどの方向に行こうとするのかは容易に理解できる。マグダレーナの名前の根拠に関しては、もう一つつけ加えることが出来る。*Historische Sagen II* に集められている「ハーメルンの鼠捕り男」の異伝の一つに、笛吹き男は Teufel (悪魔) として表現され、その Teufel が人間の形をして、Maria Magdalena の日に、ハーメルンへやって来たという部分が認められる。

“...Vngefährlich für 180 jaren hat sichs begeben zu Hameln inn Sachssen an der Weser, das der Teuffel am tag Maria Magdalene inn menschlicher gestalt sichtiglich auff den gassen vmbgangen ist,hat gepiffen vnd vil kinder, knebele vund meidle, an sich gelockt vnd zum stadthor naußgeführt an ein berg, da er dahin kommen hat er sich mit den kindern, der sehr vil gewest, verlorn. das niemand gewust, wo die kinder hin kommen sind.....”

(……約180年前ウエーザー川沿いのザクセンのハーメルンで、次のようなことが起きた。悪魔が人間の形をしてマリアマグダレーナの日に町の路地を行き、笛を吹き、大勢の子供達、少年も少女も誘い出し、町の門から出てある山へと連れて行った、彼はとても大勢の子供達と一緒にいなくなった、誰も子供達がどこへ行ったか知らない……)

いずれにしても、マグダレーナに与えられた<聖>なる意味合いは変わらない。同じ書物で扱われている伝記の最後のものが、グリムに採録されたと思われるが、その中で、市長の娘も子供達と一緒に笛吹き男の後についていったと記されている。

“...Als bald kamen diesmal nicht Ratten und Mäuse, sondern Kinder, Knaben und Mägdlein vom vierten Jahre an, in großer Anzahl gelaufen, worunter auch die schon erwachsene Tochter des Bürgermeisters war. Der ganze Schwarm folgte ihm nach.....”

(…………まもなくやって来たのは、今度は鼠ではなく、4歳以上の男の子、女の子からなる大勢の子供達だ、そのなかには、もう成長した市長の娘もいた。一団となって彼の後について行った…………) (33)

エンデの作品で、マグダレーナは、笛の力で真実に迫ろうとする見知らぬ男に清純な恋心を抱きながら、悪に立ち向かおうとする乙女になる。笛吹き男から、七つの山 (Siebenbergen) の向こうにある美しい楽園の神秘を聞かせてもらい、そこに想いを馳せるが、誤って邪悪な母親の手にかかり、命を落とす。言い伝えのように、子供達と一緒に山の向こうには行けないのである。

2) 笛吹き男 (鼠捕り男) の像

笛吹き男は、史実によれば、中世中部ヨーロッパでよく見られた旅芸人であり、社会階層の中でも、差別的扱いをもっとも受けた賤民の一部として位置づけられる。既述したように、放浪する人は、乞食や、ジプシーと

同じように、名誉を与えられない人々であり、「……どんなに美しい服を着、どんなに高い報酬を受けようとも、彼らが賤民である事実を覆い隠すことはできなかった。彼らの身体と生命は、財産と同じく保護を受けることはなかったのである。」⁽³⁴⁾また、前記の *Historische Sage II* に、“Teufel” とあるごとく、人々から、蔑視され、疎んじられた。

さて、*Der Rattenfänger-Ein Hamelner Totentanz* においては、笛吹き男は、一言も話さず、ただ笛を吹くだけでその意志を伝えるという、再び、象徴的な人物像である。登場の初めから、子供達が男を囲み、その無垢な心を開いた。男が笛を吹くと、枯れ木が芽を吹き始める。子供達を惹きつけ、新生をもたらす魔力を備えている。鼠の大群を駆逐し、そして、市上層部に騙され、市外に閉め出された時、その笛の音は頑強な市門を打ち破る。この笛吹き男の扱いに、エンデは二つ目の大技巧を凝らした。

エンデならではの技巧である。つまり、男と笛を分けてしまったのである。男が不思議な力を持つのは、その笛を持っている間だけである。市長夫人の企みにより、笛を取りあげられてしまった男には、もはや、見る影もない。謝肉祭で人々が見せる狂態の騒ぎの中で、滑稽な道化の衣装を着せられ、両手両足に重い鎖をかけられた笛吹き男は、人々の笑いものになる。それぞれ三人ずつの民衆の男女がうたう歌は；

Wer bei dem Narrentanz auf Erden
kein Narr wird, ist nicht recht gescheit.

Ihr narrt, um nicht genarrt zu werden,

und zeigt durch Masken, was ihr seid,

Ihr Lumpenliebchen, Luderlaffen,

さあさ、俗世の阿呆踊り
阿呆にならぬは、阿呆らしい。

言われぬ先さきに、阿呆になり、

被った面こそ、てめえの姿。

そおら、やくざな姉さん、

Greet Buhlebalg, Hans Wanstefett...

Mich deucht, Gott hat uns nur erschaffen,

damit er was zu lachen hätt'.⁽³⁵⁾

極道兄さん、

売女面グレーテ、太鼓腹

ハンス

笑いの種にしようとして、

神様、おれたち、創った

のさ。⁽³⁶⁾

中世世界のカーニバルで見られる人々の狂態や愚かしさの様が、生き生きと表現されている。ブリューゲルやボッシュの絵を思わせると作者自身も描写するように、上層部の意のままに、我を忘れて、最後には救い主であるはずの笛吹き男を見捨てる、民衆の愚かさは、まさに、Totentanz 死の踊りに自滅するかのごとくである。

以上のように、非常に弱い人間存在として描かれる〈笛なし男〉に対し、〈笛〉の力はそのまま残り、あのアウリンを首から下げている限り、不思議な力を発揮できるエンデのかつての主人公の場合を思わせる。しかし、今回の場合は、あの時のように、単刀直裁には描かれていない。子供達とマグダレーナに助けられた笛吹き男は、再び、笛を手にするが、元の活力ある姿には戻ることは出来ない。カルヴァリーの丘に子供達を引き連れてやってきた笛吹き男は、「彼の顔、彼の服は今もう、石のように灰色だ。彼は動くのももう大儀そうなのだ。⁽³⁷⁾」また、「彼はもう吹いていない。今は、子供達が彼を導いているように見えるのだ。⁽³⁸⁾」そして、僧院長が、フルダ修道院の司教座と交換に、Mammon とハーメルン市の提供を申し出た結果、市に突進して来る傭兵からなる軍隊の前に、力尽きるのである。笛を子供達に託して、自らはカルヴァリーの石になる。この最終部分が、笛吹き男に与えた、作者の意表を衝く創作の第二点である。最終部分に展開される予想外のいくつかの場面については、次の項で、全体的な評価の中で考えてみたい。

3) 作品の結末—著者の意図

① 子供達の行った先

鼠の害に溢れ、笛吹き男に裏工作を見抜かれ、今や、Mammon の存在に気づき始めた民衆を相手に、町の取扱いに追いつめられた権力者の僧院長が要請した軍隊がエーベルシュタイン伯爵に指揮されて町を攻めてくる。史実のエーフェルシュタイン伯はハーメルンの守護職であり、この文脈のように、反乱民衆を抑えるために軍隊を用いたことがあったのかどうかは不明である。エピローグで、この攻撃により町は全滅し、誰も免れた者はいない、と解説役の二人の子供に言わせている。足萎えの女の子と盲目の男の子は、伝記では130人の失踪の証言者であり、ここでは、ハーメルン市全体の滅亡の証言者に拡大されている。又、史実によって、既述のように、ゼデミュンデの戦いで非常に多くのハーメルン市民の命が奪われたことを述べた。この戦いは、守護職と市が、聖俗合わせた外部の権力と戦ったものであり、当時よく見られた領邦主達の領地争いに並ぶものでもある。いずれにしろ、こうした史実に創作の源を得ていることに違いはない。

笛吹き男に導かれた子供達は、カルヴァリーの丘が開いて、その穴に笛と共に消えて行くのであるが、カルヴァリーの丘とは、伝説のコッペンベルグ(作品中 Köppenbergr)に隣接し、史実では、16世紀以降処刑場として使われ、キリスト磔刑のゴルゴダの丘に模せられてきた。物語りで、真実を予言した司祭ヴェレゲジウスに見るように、「以前から、真実を語った者は、みな生命を奪われた場所⁽³⁹⁾」である。男が最後の笛を吹き始めると、丘がゆっくり開き、その裂け目から黄金の光が射してくる。子供達は感嘆しながら、夢見るように中へ入って行く。男から離れて、子供の手へ渡された笛は、今や、ひとりで鳴りつつける。

この丘は、その前にマグダレーナの夢の中で次のように現れる。

Da war ein Berg, der tat sich vor uns auf.
Ein wundersames Licht kam da herauf.
Du hast mich bei der Hand genommen,
und sieben Feuer mußten wir durchqueren.
Und hinter sieben Bergen, sieben Meeren
sind wir am Ende in ein Land gekommen,
wo alles schön war, rein und sonnenklar,
so wie die Welt nach Gottes Schöpfung war.
O lieber Fremdling, willst du, dann erzähle
mir von dem Land, so schön und wundervoll.
Ich sehne mich dorthin mit ganzer Seele
und weiß doch nicht, wie ich's erreichen soll.⁽⁴⁰⁾

ゆうべ、私は夢を見た
それは私たちの目の前で大きく開いた山だった。
目眩む光がそこから射した。
あなたは私の手を取り、
共に七つの火をくぐり抜け、
七つの山と、七つの海を踏み越えて
とうとう目指すところにやってきた。
すべてが美しく、清く、日の光のごとく明るくて
そこは神の造りたもうた御国。
いとしい旅人よ、どうぞ、話して下さいな
そんなに美しく、素晴らしい場所のことを、
身も心もひとつになって、私はそこに憧れる
なのに、どうしてそこに着けるのか私は知らない。

七つの火と七つの山と七つの海を越えてたどり着く先は、パラダイスで

ある。「白雪姫」が七人の小人に囲まれ、七つの山の向こうにいたように、「七つの山」は、数多くの聖杯伝説にも見られ、メルヒエンの普遍的な幸せの鍵となる表現である。また、諸研究の中で子供達の行方に関する推測の一つとして挙げられているルーマニア東部、トランシルヴィア地方のジーベンビュルゲンに、Siebenbergen をかけているのは、作者の技巧的な遊びとしては、成功し過ぎているように思う。

醜い Mammon の存在と、自らの欲得の為に、無力な無為民衆の死の犠牲の上に、それを必死で守ろうとする上層部の筆舌にし難い悪徳とグロテスクの様をさまざまに展開した後、物語りは子供達に美しい夢を託した。町全体が息絶えた後も、その中で町の未来を子供達は引き受けた。真実を見通す笛という力に守られて、彼らは七つの山の向こうの Siebenbergen、つまり、ジーベンビュルゲンにたどり着くに違いないという、作者の好きな言葉を使えば、ポジティブな確信を読者に残した。

② 石になった笛吹き男の意味

本来では子供達を導いて山の中に姿を消すはずの笛吹き男が、なぜ、自ら残り、そして道ばたの石になってしまったのか。この奇抜とも言える展開について、作者の容易でない意図をくみ取りたいのが普通である。しかし、これは、かなり難しく、いくつかの推測を試みるほかない。登場者の中で、人物は人物として描かれ、Mammon である Rattenkönig とこの笛吹き男以外、自らの存在の形を変幻する者はない。となると、この二者は人間ではなく、魔術師なのか。既述の異伝では、笛吹き男は人間の型をした Teufel 悪魔であると表現されている。ネガティブにであろうが、ポジティブにであろうが、自己を変えることが出来るのは、この世の存在ではなく、霊的な存在である。エンデに内在する考え方に、転生思想がある。そのことを再び、ここで詳細に持ち出すことは控えたいが、過去の彼の作品にはこの背景理論で物語りを縦横に展開させてきた。

今、笛吹き男は石に転生したと述べる子安美智子氏の解説を引いてみたい。氏は、男は残る渾身の力で、自らを地上世界の変革のために、生け贄にしたと述べる。つまり、霊的な存在は重力のある物質世界に受肉して初めて、この世に働きかけることが出来る。男の最後の戦いは、地上の石に化すことによって成就されたとする。しかし、この子安氏の解釈には100%首肯出来ない。または、エンデ自身がここに重力の象徴としての石を、笛吹き男の転生存在として挿入したのであるなら、その唐突さは読者を戸惑わせる。疑問として提示するなら、一に、ここで転生はどうしても必要で、化身の対象は石でなければならなかったか。道端の石になった笛吹き男は、軍隊の進軍の中、支払られるお金の量で動く傭兵⁽⁴¹⁾の軍靴に踏み碎かれる。子安氏も「自問の中にあるのみだ」と逃げるが、ここには、氏が述べるように、「物質世界の生を丸ごとその身に刻印しつつ、人間世界を霊の意図に沿って修正しようと戦う⁽⁴²⁾」笛吹き男の変革の姿勢は感じられない。これが疑問の第二点である。

③ Mammon の勝利

初めに図示したように、この物語りの構図は、明らかに、町の上層部から成る偽りの側対、司祭ヴェレゲジウス、マグダレーナ、笛吹き男、子供達から成る真実の側の抗争と言う単的な形をしており、結局は前者が後者を組み伏す筋書きである。真実の予言者ヴェレゲジウス、マグダレーナの死に続いて、笛吹き男も、「以前から真実を語った者は、みな生命を奪われた丘」に消える。それに対応する側は、僧院長の企みが効をなすことによって、自らの階層を含めて、町の全滅を許してしまう。

しかし、この上層部を、作者は一律には描いていない。策謀の女狐のごとき市長夫人アテーラの死は、我が娘マグダレーナを誤って手にかけることで、身から引き起こした苦しみと悲嘆の結果であった。このことは悪徳行為が真実の力に潰えたことを意味している。また、軍隊に町を譲り渡す

決断は、他を犠牲に行った僧院長の独断であった。ここに、当時のカトリック教会が神の力を傘に着て人々の心を翻弄し、市と領邦君主と癒着し、世俗的な権威を押し進めたその偽りの姿に対する作者のネガティブな思いが示されていると考える。鼠の害に苦しむ人々、彼らを如何に騙し手懐けようと腐心する市長達を尻目に、宗教の権力を傘にきる僧院長は、ハーメルン市を「Schiff voll Narren 狂人どもに溢れた船」と言い、「……沈み、溺れて行く、愚か者のやり方で」、その後、「私は違う！⁽⁴³⁾」と発して、自分一人の救済と同時に町の売り渡しというさらなる悪事に思い至る。「もっとも偉大な権力」、即ち、「聖職者の力」はこうして、作者の最大の批判の対象に位置づけられる。

まことに卑猥にグロテスクなものとして描かれる Mammon の像は、笛の音に追いつめられると活力を失い、マグダレーナの死で再び、巨大になり且つ、嫌らしい血色を取り戻すという、この世のものではない悪の象徴である。この Mammon を守る地下聖堂での秘儀での表現は、金銭について廻る悪徳を次のように表す。

Gelobt seist du, unser Gott,
denn wo alle sich an allen bereichern,
da werden am Ende alle reich. (Amen! Amen!)

Und wo alle auf Kosten aller reich werden,
da zahlt keiner die Kosten.

O Wunder aller Wunder! (Amen! Amen!)

So sind wir unsere eigenen Gläubiger
und unsere eigenen Schuldner,
und wir vergeben uns
unsere Schulden in Ewigkeit, Amen! (Amen! Amen!)⁽⁴⁴⁾

われらの神なる主はたたえられよ、
すべての者がすべての儲けの種となすところ、
やがてはすべての者が富者となろうゆえ。

(アーメン！アーメン！)

すべての者が、他のすべての者の負債で富み肥えるところでは、
負債を払う者もなし。

これぞ奇跡の中の奇跡なり。 (アーメン！アーメン！)

かくして、われら、おのが債権者にして債務者となり、
永遠に、おのが負債を免除する。アーメン。

(アーメン！アーメン！) (45)

金銭の自己増殖機能と、それに自己を売り渡している罪多く、恥ずべき人間の姿を、思いのたけ皮肉っている。現代の資本主義社会の実像と、実によく唱和するではないか。20世紀の社会も、いずこかに Mammon が隠されているかの如く、蓄財に奔走する人々がいる一方で、一向に豊かな暮らしに到達できない多くの人々がいる。そして、見えざる Mammon の手は、権力の魅力に捕らわれた者を通して、「真^{まこと}」の在処を捜し求める人々を、ますます追いつめていく。いつの時代にも通じる永遠の課題であるだろう。

金欲の神、Mammon が、最終場面近く、エーベルシュタイン伯爵に売り渡された時、それは隠され、しぶとく存続して行くことが暗示される。最後のエピローグで、

Den Popanz hat man fortgebracht

und wurde gar sofgsamlich bewacht.

Doch wo er heut geblieben ist —

wer sollt' es wissen, wenn ihr's nicht wißt? (46)

その化け物は運びさられ、

嚴重に警護された。

今日いずこにあるのか—

誰がそれを知っているのでしょうか、あなた達がもし知らないとしたら。

と、観客に二人の証言者が語りかける。この解説者である二人の子供が問いかける言葉は、当伝説の持つ影の部分が、作者によって現代に繋がれていることを示す。

この伝説が登場した時代は、既述のとおり、商業活動の隆盛にもなつて、人々の生活、人間関係、社会機構にさまざまな変化が現れた。人々は物質的にばかりでなく、その精神は「金銭の魔力」という新たな Teufel に突き動かされ、それまでになかった闇を背負ったであろう。鼠取り男に正当な報酬が支払われなかったという謎は、エンデにとって現代的課題に通ずるものであった。敢えてその点に挑戦した作者の心意気を感じることができる。今日の複雑な経済機構の中に、オブラートをかけられている如く、真実が見えなくなっている我々に対する著者のメッセージであり、警告であると受け取ることが出来よう。

以上、かなり長く、作品と向き合うなかで、作者エンデが、伝説の歴史的背景を細かに検討し、人物設定をしていること、そして、子供達の失踪の行き先を未来に対する希望に繋げたことで、当時の子供達の両親、及びハーメルンの町の人々の切ない期待を効果的に盛り込んだことが理解できた。また、醜すぎる金と欲の神、Mammon を造り上げることと、笛吹き男を独創的な像に仕立てることで、独自のファンタジーを飛躍させた。ただ、この独創によって、「むかし、ハーメルンという小さな町で……」と子供達に語って聞かせる昔話に共通する、のどかさは消えたことに間違いはない。子供の失踪の悲劇のうえに、鼠と死、のキーワードは不吉な印象を与え、

さらに、現代的な「お金」と結び付けることですでに、古典的な伝説の雰囲気は壊されていると言える。それは、金銭というテーマが、ファンタジーを重要要素とする物語りに如何に破滅的な効果をもたらすかという衝撃でもある。

<結びにかえて>

少し欲張りすぎて、対象を広げすぎてしまった。M. エンデの「ハーメルンの笛吹き男」がいかにも奇抜すぎ、その伝説の形を読むうちに、阿部謹也氏の卓越した初期形から始まる分析にぶつかった。また、それと共にヨーロッパ中世の世界があちらこちらから手招きした。笛吹き男と子供達だけのはなしに何故鼠捕り男の復讐のはなしが加わったかという理由を、当時の社会状況から説明できることに少なからぬ興奮を覚えた。また、19世紀の二人の偉大な詩人により、芸術の香り高く紹介され、この伝説の持つ悲しみを越えて、その愛らしさ、不可思議な神秘性が、人々に親しまれるようになったことを理解した。

そして、20世紀のファンタジーとシュールリアリズムをその得意な技法とする作家は、現代人の感性で、この伝説の隠された部分、つまり、何故、市長達は鼠捕り男に約束の報酬を支払わなかったのか、に答を出そうと試みた。

21世紀を目の前にする現代は、確かに伝説は似合わない。しかし、16世紀の人々が彼らの目で、思いで、それまであったはなしに夢を託し、肉づけしたように、今の時代の我々も、我々の思いを託すことがあっても良いではないか。行き着くところまで行ったと言われる技術革新と、その反動で生身の人間の心と身体の充足は忘れられがちである。人間の本当の幸せとは何かと問いつつ、焦り、答を見い出せずくすぶり続ける我々の思いが、古い伝説に我々の肉づけを行うことで答えの一つに近づけるのであれば、

それは素晴らしいことではないか。

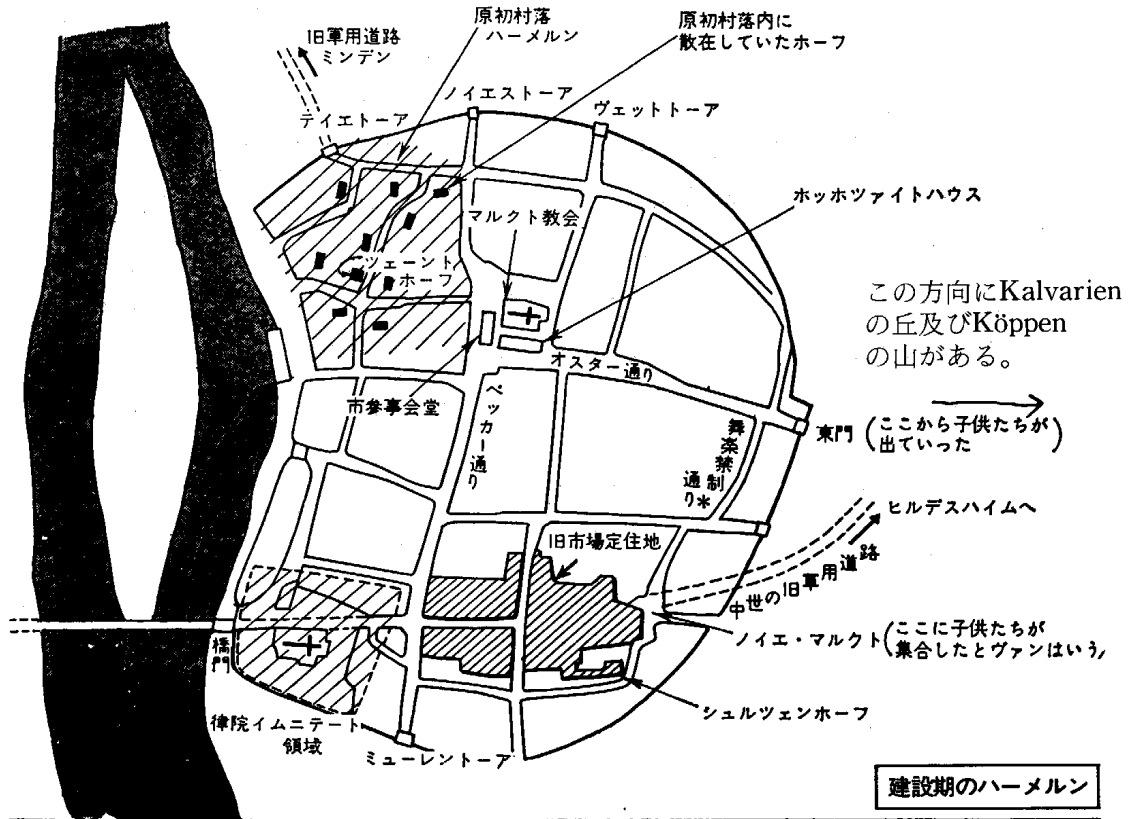
M. エンデの「笛吹き男」は、そうした試みの一つだと言えるかもしれない。鼠の発生と報酬の出所を一致させるという工夫は、人間の金銭欲とそれがもたらす不幸を鋭く風刺したが、それと同時に、技巧的過ぎ、また、その道具立てはきわどさが過ぎ、全体の中でアンバランスな印象を残すのは残念である。過去に書かれた作品 *Der satan-archäologenialkohöllische Wunschpunsch*（「魔法のカクテル」）でも、現代文明の引き起こす諸現象を批判する中で、金銭を対象にした。がここでは、コミカルな味わいが寓話的要素をかえって、光らせていたように思う。それに比べ、今回は、出典がよく知られた伝説であるという点で、制約を受けたことは否めない。この作品が、20世紀人の伝えた「ハーメルンの笛吹き男」として生き延びるかどうかは、これからの人々にまかせるしかない。

<註>

- (1) *Brüder Grimm Deutsche Sagen, Band 1*,
Herausgegeben von Hans-Jörg Uther, Eugen Diederichs Verlag,
München, 1993
グリムによる初版は1816年と1818年
- (2) Max Lüthi, *Das Europäische Volksmärchen <FORM UND WESEN>*,
A. Francke Verlag, Bern, 1947
小澤俊夫訳, 「ヨーロッパの昔話」岩崎美術社, 1969年, 148頁
- (3) *Historische Sagen II—Ritter, Räuber und geistliche Herren*,
Herausgegeben von Leander Petzoldt, C. H. Beck, München, 1977,
“Vorwort”より
- (4) 阿部謹也「ヨーロッパ中世の世界観」, 講談社, 1991年, 16頁
- (5) 阿部謹也「甦る中世ヨーロッパ」, 日本エディタースクール出版部,
1987年, 244頁
- (6) *Brüder Grimm Deutsche Sagen*, a.a.O., s.15
- (7) 子供達が消えた山は, ここでは, Kalvarien であるが, 阿部氏はカルワリオ山と日本語化し, 伝わる形毎にズレが見られる。ポッペンベルグ, コッペン

ベルグ、コッペンなど。ある山というのものもある。

- (8) *Historische Sagen, a.a.O.,s.66*
- (9) ハーメルン市の当時の地図



阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」41頁参照。

Kalvarien に行く為には町を出て行く時、どうしても通るだろうと想定される市の東側の門であり、Bungelose 通りとともに、この伝説の象徴的な要素でもある。なお、現在のハーメルン市に、この通りは実在であり、道角にある“RATTENFÄNGERHAUS” (*の所) という古い建物のレストランの外壁にその由来が明記されている。

- (10) 阿部謹也, 「ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界—」, 平凡社, 1974年, 52頁
- (11) 前掲書, 52頁
- (12) 前掲書, 59頁
- (13) Jean-Pierre Leguay, *La rue au Moyen Age*, Quest-France, Rennes, 1984
井上泰男訳, 「中世の道」, 白水社, 1991年, 276-277頁にその狂態の様が非常に具体的に描かれている。

- (14) 註(9)の地図参照, この通りの名前の由来は, 子供達の失踪後, 町の悲しみを表すために人々によってつけられたとされている. 18世紀半頃まで舞楽と楽器の演奏は禁じられており, 花嫁の行列もこの通りでは静粛にしなければならなかったという. 阿部謹也「ヨーロッパの宇宙観」参照.
- (15) 註(3)参照
- (16) 阿部謹也, 前掲書, 167頁
- (17) ペストの流行は6世紀以来, ヨーロッパ社会の変動の時期と重なって20世紀初めまで, ほぼ300年間隔で襲ってきている. 詳しくは村上陽一郎「ペスト大流行」岩波新書225参照
- (18) 前掲書, 172-173頁に, 市当局と教会が, 市民が1551-53年の災害に恐れおののいていることを利用し, <笛吹き男伝説>を自分達の権威づけの為に取り込み, 市の新門に, 1556年ラテン語の碑文を彫りこませたことが書かれている.
- (19) ヨーロッパ各地に見られる鼠捕りの話については, いくつかあるうちで, 鼠捕り男の報復は, 子供達を引き連れるのではなく, 村の家畜全部という, フランスの話が面白い. 阿部謹也, 前掲書, 181頁, 及び, *Historische Sagen* s. 218~219
- (20) 前掲書, 190頁
- (21) 前掲書, 193頁
- (22) 前掲書, 201頁
- (23) 前掲書, 207頁
- (24) *Goethes Werke in zwölf Bänden, Erster Band,*
Auf-Verlag Berlin und Weimar, 1966, s.311-312
- (25) 高橋健二「ゲーテ詩集」, 弥生書房, 1964年, 80-81頁
- (26) Kenji Ishida, *Selected Poems of Robert Browning,*
Kenkyusha Tokyo, 1954, p.96-106
- (27) Michael Ende, *Der Rattenfänger-Ein Hamelner Totentanz,*
Weitbrecht München, 1993
- (28) 子安美智子, 「解説 死の舞踏—二十世紀末世界像の伝説」
ミヒヤエル・エンデ「ハーメルンの死の舞踏」佐藤真理子・子安美子訳
朝日新聞社, 1993年 190頁
- (29) 阿部謹也, 「ハーメルンの笛吹き男」前掲書, 34頁参照.
- (30) カルヴァリーの丘は, 古きはゲルマン信仰の聖域であったが, 16世紀以降罪人の処刑場であり, キリスト磔刑のゴルゴダの丘を模した巡歴路が作られたとのことである. 前掲書 170頁参照.

- (31) Michael Ende, a.a.O., S.55
- (32) 子安美智子, 前掲書, 191頁
- (33) *Historische Sagen*, a.a.O.,s.66
- (34) Heinrich Pleticha, *Bürger Bauer Bettelmann*, Arena-Verlag Geirg Popp Würzburg, 1971
 関楠生訳「中世への旅, 都市と庶民」白水社, 1982年, 148頁
- (35) Michael Ende, a.a.O.,s.66
- (36) ミヒヤエル・エンデ, 前掲書, 152頁
- (37) Michael Ende, a.a.O.,s.74
- (38) *ibid.* s.75
- (39) *ibid.* s.75
- (40) *ibid.* s.69
- (41) 「傭兵」は1300年代に中, 上級階層出身の騎士階級がゆるやかに没落し始めるのに代わって下級市民及び農民階層から集められた。過剰人口による貧困状況を脱するための一つの逃げ道であった。ランツクネヒトの呼び名で, 様々な話や歌の中に登場し, 現在まで伝えられている。酒場などに勇気があり, 有能な兵士として装飾的な姿で古き時代のロマンチックな雰囲気と共に描かれるが, その現実には, 流血と困窮と悲惨の一生であった。詳しくは次を参照。
 Heinrich Peticha, *Landsknecht Bundschuh Söldner*,
 Alene-Verlag Georg Popp, Würzburg 1974
- (42) ミヒヤエル・エンデ, 前掲書, 201頁
- (43) *ibid.* s.54
- (44) *ibid.* s.30-31
- (45) ミヒヤエル・エンデ, 前掲書, 60頁
- (46) *ibid.* s.79